

西林木町の伊努谷川源流地点北方の「才の原」の後方地帯が「大床」と呼ばれています。

古代出雲大社の本殿は、中世時代、高さが十六丈（四八メートル）・古代には三十二丈（九六メートル）あったと言われています。その本殿の引き橋（階段）を登りきると「本殿大床」と呼ばれる舞台（拝殿）があり、その「大床」の高さは推定三十メートルあって、そこからは、出雲国が一望に見渡せるような、神聖な場所だったようです。

このように、国が一望に見渡せる神聖な地帯を、昔の人々は「大床」と呼んでいたようです。

鳶巢の通称「大床」も北山山脈の頂上付近にあり、出雲平野が一望に見渡せる地帯です。

古老の話しによれば、近くには大屏風岩・高清水・鶏烏帽子と呼ばれる神宿る神聖な場所があり、古来にはこの「大床」で神儀の祭典が行われ、地域の人々は「大床」と呼ぶようになったのではないかということです。明治時代に、この「大床」の付近から弥生土器が出土しており、伝説にロマンが感じられるようです。

また、この「大床」は明治・昭和と戦後において、鳶巢村に住む数名の村人達が、農業を営むために、荒れていた山林を開墾し、タバコや果樹を植え、農業をやりかけたようですが、数回にわた

って豪雨災害が発生し、道路や畑が破砕したため結局断念したようです。

